

教育長 様

校番 93 広島商業 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書****1 学校の教育目標等****(1) 教育目標**

本校の教育目標は「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」と定めている。このことについては、4月当初の職員会議で校長から教職員に対して、教育目標を定めた意義等を説明するとともに、定例開催される教科主任会議や各教科会、各種研修会等を通して、共有化が図られている。

また、教育目標については、新しい学習指導要領の趣旨を的確に踏まえ、商業高校を卒業する生徒が高い専門性を発揮し、社会で活躍できる人財育成となるよう、校務運営会議等を通じて定期的に見直しが行われている。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

本校では、「主体的に計画を立て、粘り強く実行できる生徒 (Initiative & Self Reliance)」や「自分の考えを明確に表現し、他者を巻き込むことができる生徒 (Communication & Collaboration)」、「課題を発見し、解決のために考え抜くことができる生徒 (Critical Thinking & Problem Solving)」の育成を目指している。

そのため、短期 (本年度) 目標として、「各教科の見方・考え方を働かせ、論理的に考察させるとともに、的確に表現できる力を育成する」と定め、各教科において「本質的な問いを設定するとともに、育成したい資質・能力を見取るルーブリック評価を作成する」こととしている。

育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力についても、4月当初の職員会議で校長から教職員に対して意義等を説明するとともに、定例開催される教科主任会議や各教科会、各種研修会等を通して、共有化が図られている。

また、教育目標同様、新しい学習指導要領の趣旨を的確に踏まえ、商業高校を卒業する生徒が高い専門性を発揮し、社会で活躍できる人財育成となるよう、校務運営会議等を通じて定期的に見直しが行われている。

(3) 学科等の特色

本校は、これまで教科「商業」における4分野 (マーケティング、ビジネス経済、会計、ビジネス情報) の専門性を高めるために、商業科・国際経済科・会計科・情報システム科の4学科 (小学科) を設置し、各学科では、1年次で商業に関する基礎科目を共通に学び、2・3年次で専門性を深めていくための教育課程を編成していた。

令和4年度入学生より、商業高等学校4校 (尾道商業、広島商業、呉商業、福山商業) は、既存の複数学科 (小学科制) を発展的に統合し、単一学科「情報ビジネス科」に学科改編した。1年次は商業科の基礎的科目である「ビジネス基礎 (ビジネス探究 I)」、「簿記」、「情報処理」を共通的に学習し、2年次からは各自の興味・関心、進路希望や適性に応じて選択できる選択科目群を設定し、個別最適な学びの実現を目指すこととしている。また、ビジネス探究プログラムを中心とした課題発見・解決学習の充実を行うとともに、変化の激しい社会に柔軟に対応できるプログラミング教育の充実を行うなど、商業の専門性を更に高めるための教育課程を編成している。

2 研究の概要**(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標**

- 幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献することのできる人財育成
- 社会が抱える課題を認識し、科学的な根拠に基づいて、その解決を提案することのできる人財育成
- 社会で活用できる最先端のビジネススキルを身に付けさせるための教科横断的な探究活動の充実
- 変化の激しい社会に柔軟に対応し、高度情報通信社会で活躍するためのプログラミング技術の習得
- 外部機関との連携を強化し、高度な知識・技術を身に付けさせるためのフレックス・タイムの導入

(2) 3年後の目指す学校の姿

- ・将来活用できる知識・技術等を確実に生徒に身に付けさせるとともに、課題解決力を備えた生徒を育成する。
- ・対人能力(※1)、自己制御力(※2)を生徒に身に付けさせるとともに、主体的に計画を立て、粘り強く実行することができる生徒を育成する。
- ・使命感にあふれ、新たな価値に挑む教職員であるとともに、計画的・組織的なカリキュラム・マネジメントの充実を図る。

※1 対人能力：リーダーシップ、コミュニケーション力、公共心、規範意識など

※2 自己制御力：意欲、忍耐力、自分らしい生き方や成功を追究する力など

(3) 各年度の目標

年度	アウトプット(活動指標)	アウトカム(成果目標)
令和3年度	<ul style="list-style-type: none">・「ビジネス探究Ⅰ」において、「ビジネスの体系的・系統的理解」を評価するためのルーブリックが作成されている。・「ビジネス探究Ⅰ」において、「科学的な根拠に基づいて創造的に解決する力」を評価するためのルーブリックが作成されている。	<ul style="list-style-type: none">・「ビジネス探究Ⅰ」における「ビジネスの体系的・系統的理解」の評価3以上の生徒が70%以上になっている。・「ビジネス探究Ⅰ」における「科学的な根拠に基づいて創造的に解決する力」の評価3以上の生徒が70%以上になっている。
令和4年度	<ul style="list-style-type: none">・「ビジネス探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の系統性が整理され、それぞれの科目で身に付けさせたい資質・能力が明確になっており、資質・能力の習得を見取るためのルーブリックが作成されている。・教科横断的な学習指導の具体的方策について、研修等を通じて、教員が明確に理解している。	<ul style="list-style-type: none">・「ビジネス探究Ⅱ」における「NFTE Mindset(8つの資質・能力)」の評価3以上の生徒が70%以上になっている。・教科横断的な学習活動の方策に関する研修会を実施後の教員アンケートで、「実践につなげることができる」とする肯定的評価が80%以上になっている。
令和5年度	<ul style="list-style-type: none">・3年間で身に付けさせたい資質・能力が教科横断的に整理され、各教科の授業において、資質・能力の育成に着目した取組が行われている。・各種ルーブリック評価等を用いて、生徒の資質・能力の伸長が適切に評価されるとともに、個に応じたアドバイスがなされるなど、個別最適な学びが実現されている。	<ul style="list-style-type: none">・「授業評価アンケート」等において、「教科横断的な授業の取組がなされている」と回答する教員・生徒の割合が80%以上になっている。・「授業評価アンケート」等において、「個に応じた適切なアドバイスを行っている(なされている)」と回答する教員・生徒の割合が80%以上になっている。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

商業科・科目「ビジネス探究Ⅰ(ビジネス基礎)」

商業科・科目「ビジネス探究Ⅱ(EEプログラム)」

イ カリキュラム開発の概要

本校では、教育目標に定める「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」ことを目指し、次の資質・能力を生徒に育成するためのカリキュラムを開発する。

- ビジネスに係る最先端の知識・技術
 - ・社会で活用できる最先端のビジネススキル
 - ・断片的ではなく、相互に関連付けられた知識・技術
- 新しいビジネスを創造する能力
 - ・社会が抱える課題を認識し、その解決を提案できる力
 - ・科学的な根拠に基づき状況を分析することができる力
- 他者と協働してよりよく課題を解決する能力
 - ・他者と協働して課題を解決しようとする力
 - ・自己の適性を踏まえたリーダーシップを発揮する力

このカリキュラムの開発に当たっては、これまでの小学科制(商業科、国際経済科、会計科、情報システム科)を発展的に統合し、単一学科「情報ビジネス科」に学科改編することを通して、生徒の多様な進路希望に適切に対応するとともに、高度なプログラミング技術を有するなど、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う人財を育成することのできる編成とする。

(マクロレベル)

令和2年度に校内研修等を実施し、本校生徒の強み・弱みなどを洗い出し、育てたい生徒像と身に付けさせたい資質・能力を策定した。それを基に教務部を中心として令和3年8月にマスタールーブリックを作成し、各教科で検証するとともに、10月からの研究授業で活用した。マスタールーブリックのレベル3・4については学校教育目標の実現に向けた適切なルーブリックとなるよう、引き続き改善していく。

(ミクロレベル)

商業高等学校4校による令和2年度からの商業高校アップデートの取組を行いながら、学科改編とカリキュラム開発を進めてきた。コアカリキュラムは1・2年次の「ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ」とし、3年次には「課題研究」を設定し、「課題発見・解決学習」の充実を図るカリキュラムとした。さらに共通教科での探究的な学びを充実させるため、3年次の選択群に国語探究、地歴探究などの生徒の興味・関心を深める探究的な学びの時間を設定した。

2・3年次に「プログラミングⅠ・Ⅱ」を設定し、変化の激しい社会に柔軟に対応し、高度情報通信社会で活躍するためのプログラミング技術の習得を目指すこととした。

1～3年次に「フレックス・タイム」を2単位設定し、個別最適な学びの実現を目指す。1年次の前半には共通プログラム（PC設定・基本技術の習得、ICT講座、平和文化学習、長期インターンシップ等）を実施する。1年次後半以降は生徒が興味・関心に応じた個別プログラムを選択し、資質・能力の向上や進路実現に向けて主体的に学べる場を設定する。この実施に当たっては、専門的外部機関と連携し、学びの充実を図ることとしている。

研究授業については、今年度の6月と11月に2回実施した。6月はコアカリキュラムである「ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ」の研究授業を行い、「課題発見・解決学習」の推進に向けて、ビジネス探究プログラムの学習内容や生徒の取組の様子について理解を深めるため実施した。11月にはマスタールーブリックを活用した各教科による研究授業を実施し、「課題発見・解決学習」をどのように各教科の指導に取り入れるかについて考察した。

また、授業研修会（校内研修）を12月23日（木）に行った。山口大学大学研究推進機構 知的財産センター教育部門 陳内 秀樹 准教授に講演していただき、「課題発見・解決学習」の基礎的・基本的理解と、生徒の学びを深めるための具体的な手法、地域と連携した他県の取組などを学び、本校の「課題発見・解決学習」の充実に向け、理解を深め、考察し協議した。

ウ 校内体制

教育目標の実現に向けたカリキュラムを開発するためには、3年間で系統的な学びにつながる教育課程を編成するとともに、各教科が主体的に考え、生徒の資質・能力の育成に必要な科目を選択し、設定する必要がある。それらを推進するため教育課程検討プロジェクト会議を編成し、管理職・主幹教諭・教務主任・進路指導主事・商業学科主任を中心としたメンバーで学科改編とカリキュラムの開発を進めた。

教育課程検討プロジェクト会議を中心に、検討内容は校務運営会議や教科主任会議、分掌会、学年会、教科会で報告、検討し、意見を再集約した。プロジェクト会議には分掌主任、学年主任が参加することとし、学校全体で取り組む体制を構築した。

(5) 学習評価

学習評価については、各教科の特性に応じた多面的な評価が随時行われている。シラバス等を活用した単元や学期ごとの自己評価、ルーブリック評価を実施し、生徒の学習状況の把握や授業に対する取組状況、資質・能力の育成がどの程度達成できているかを検証し、指導方法等の見直しが行われている。

各教科で本質的な問いを設定し、パフォーマンス課題により学習評価を行うことに取り組んだ。さらに、コアカリキュラム（ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ）では育成したい資質・能力を見取るルーブリックを作成し、5月と2月に実施し、その変容を分析した。

教員の意識を高め、「知識・技能」の評価に多くの比重が置かれることのないよう、研究授業や校内研修を行い、教員の資質・能力の向上を図った。研究授業は今年度の研究テーマ（短期経営目標）を「各教科の見方・考え方を働かせ、論理的に考察させるとともに、的確に表現できる力を育成する」と定め、6月にコアカリキュラム（ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ）、10月～12月に各教科の研究授業を実施した。12月には山口大学大学研究推進機構 知的財産センター教育部門 陳内 秀樹 准教授による授業研修会を開催し、「課題発見・解決学習」についての基礎的・基本的理解を深め、「課題発見・解決学習」の充実と学びを深めるための具体的な手法など、教員の授業力向上を目指すとともに、生徒の資質・能力の変容を見取るための評価方法の研究を進めた。

(6) カリキュラム評価

本校のカリキュラムについては、新学習指導要領の趣旨や学校運営協議会の意見、生徒の学習状況の評価等を踏まえ、次のような課題が明らかになっていた。

○ 技術革新・情報化等の社会の急速な変化の中で、探究的な学びや高度なプログラミング技術の習得ができるカリ

キュラムとなっていない。

- 知識・技能の習得に重きが置かれ、思考力・判断力・表現力の能力の伸長を目指したカリキュラムとなっていない。
- 小学科を編成することで、より高い専門性を身に付けさせることを意図したが、商業の学びを経験していない中学生にとって、高等学校に進学する段階で細分化された小学科への自己の適性を把握することが困難であった。

令和4年度より商業高等学校4校（尾道商業、広島商業、呉商業、福山商業）が小学科制から単一学科「情報ビジネス科」へ発展的に統合することが決定した。その基本方針の下、教育課程検討プロジェクト会議においてカリキュラムの開発を進め、次のようなカリキュラムを設定した。

- 1・2年次「ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ」、3年次「課題研究」による「課題発見・解決学習」の充実
- 3年次の選択科目「国語探究」、「数学探究」といった共通教科による探究的な学びの充実
- 2・3年次「プログラミングⅠ・Ⅱ」によるプログラミング教育の充実
- 生徒の多様な進路希望に対応するための2・3年次「選択群」と将来像に応じた「履修モデル」の設定
- 1～3年次「フレックス・タイム（FT）」による個別最適な学びの充実と外部機関との連携

今年度はコアカリキュラム「ビジネス探究プログラムⅠ（ビジネス基礎）」、「ビジネス探究プログラムⅡ（EEプログラム）」を実施し、この2つの研究授業を6月に行った。生徒の学習活動に取り組む様子を見て、育成したい資質・能力を伸ばそうとする取組や仕掛け、主体的な学びを促すためのファシリテーションなど、「課題発見・解決学習」について理解を深め、今後どのように取り組むかを考えることができた。また、ルーブリックを作成し、5月と2月に1年生と2年生のコアカリキュラムで評価を実施した。2回の評価結果から、指導内容や指導方法、育成したい資質・能力について、目標を達成するカリキュラムとなっているかを検証した。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

「ビジネス探究プログラムⅠ（ビジネス基礎）」、「ビジネス探究プログラムⅡ（EEプログラム）」2つのコアカリキュラムについて6月に研究授業を実施した。授業を参観した教員に対するアンケート調査では「授業に主体的に参加している生徒の様子がよく分かった」77.2%、「授業者のファシリテートがよく分かった」79.5%、「資質・能力を伸ばす取組や仕掛けがよく分かった」84.1%、「主体的な学びを深める学習活動への理解が深まった」90.2%と肯定的評価が高い結果となり、「課題発見・解決学習」の必要性や、主体的な学びを深めるためのファシリテーションの手法についての理解が深まったことが分かった。研究協議では「前向きな意見を出し合えた」78.0%、「研究協議の内容が明日からの授業に活かせそうだ」70.8%といった結果からも、コアカリキュラムについての理解が深まるとともに、自分の意見を躊躇なく発言する環境づくりの大切さ、個人やペア、グループでの話し合いや発表活動によって生徒自身が他者から学び、成長することの重要性など、主体的に学習に取り組むためにはどのような授業づくりが必要か、意見を出し合って考えることができた。

「課題発見・解決学習」を各教科で実践するためには、さらに理解を深め、積極的に取り組める体制を作る必要があると考え、12月23日に山口大学大学研究推進機構 知的財産センター教育部門 陳内 秀樹 准教授による研修会を開催した。研修後のアンケートでは「とてもよかった」、「よかった」が100%という結果となり、「課題発見・解決学習についての実施イメージを持てた」、「これからの時代を生きる上で必要な資質・能力だと理解できた」、「他校の実践内容を聞き、具体的活動が理解できた」といった意見が多くあり、研修会によって理解が深まり、全教職員で「課題発見・解決学習」に取り組む体制づくりの基盤ができたと考える。

令和3年度に「ビジネス探究プログラムⅠ（ビジネス基礎）」でルーブリックを作成し、レベル3以上が70%以上という成果目標を設定し、取り組んだ。「ビジネスの体系的・系統的理解」のルーブリックでは、「与えられた課題を解決するためにインターネット等のメディアを活用して情報を収集することができる」のレベル3以上が79.2%となり、情報を複数収集し、比較・選択する力が授業を通して身に付いている生徒が多いことが分かった。

「ビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度」のルーブリックでは、「他者と協力し、自分の役割をこなすことができる。」と「課題を解決するための目標を設定することができる。」はレベル3以上が2つとも74.5%だった。複数の意見を調整しながら課題解決に取り組み、目標を設定するだけでなくその解決に向けた計画を立てる力が、この授業を通して身に付いたことが分かった。

「ビジネス探究プログラムⅡ（EEプログラム）」ではルーブリックを作成し、8つのマインドセット（計画実行力・自己研鑽力・独創的発想力・批判的思考力&課題解決力・コミュニケーション力&コラボレーション力・意思決定力・適応力・転換力）について5月と2月に実施した。肯定的評価が90%以上となった項目は3項目から5項目と増加しており、EEプログラムを通して自分自身に資質・能力が身に付いたと実感している生徒が増えていることが分かる。また、次の4つについて肯定的評価が大きく伸びた。「独創的発想力」の「与えられた条件の中

で自分自身のアイデアを整理することができる」92.9% (+5.8%)、「条件や答えが明確でない状況においても、その解決に向けた新しいアイデアを生み出すことができる」84.1% (+5.1%)と、「批判的思考力&課題解決力」の「自ら解決すべき課題を見つけ、その解決方法を提案することができる」88.1% (+6.9%)、「適応力」の「自らが置かれている状況を適切に把握し、その解決に向けて柔軟に行動することができる」90.9% (+4.8%)。これらの結果からEEプログラムに1年間取り組んだことで次の2つの力が育成できたと考える。1つ目は、生徒自身が商業の見方・考え方を働かせて社会や自分を取り巻く状況を適切に把握、考察し、そこから様々な課題を発見する力であり、2つ目は、その課題の解決に向けた新たなアイデアを自ら生み出し、その解決方法を提案する力である。この結果を活用し、8つのマインドセットの習得を見取るルーブリックの完成に向けて改善を進めていく。

(2) 課題

「ビジネス探究プログラムⅠ（ビジネス基礎）」における「ビジネスの体系的・系統的理解」のルーブリックでは、「ビジネスに関する基礎的な知識・技術が身に付いている」レベル3以上が60.4%となり、基本的な知識・技術は身に付いているが、実際のビジネスとの関連付けや活用場面を考える力は、十分ではないことが分かった。「課題発見・解決学習」について教員が理解を深め、生徒の学びを深めるにはどのような手法が良いかを考察することが必要である。また、「科学的根拠に基づいて創造的に解決する力」のルーブリックでは、「ビジネスに関する課題を調べて考えることができる」69.8%、「ビジネスに関する複雑な事象を整理することができる。」51.4%、「自分のビジネスプランを提案することができる。」が58.0%であった。レベル3は約40～50%の生徒が達成しているが、レベル4は約10～20%と達成できていないと感じている生徒が多い。生徒自身が高いレベルの思考力、判断力、表現力等を習得できたと感じるには、授業で様々な課題を個人やグループで考察し、まとめるだけでなく、教員からの丁寧なフィードバックを繰り返し行うこと、事象を構造化したり、解決策を提案したりする学習活動の充実を図ることが必要である。そのための指導内容の改善、指導方法の工夫が、レベルアップにつながると考える。

「課題発見・解決学習」の教員研修会におけるアンケート結果では「授業の中で『課題発見・解決学習』の要素を取り入れた場面を設定していますか」という問いに対しては「よく設定している」、「時々設定している」が合わせて約7割となっているが、「授業以外で『課題発見・解決学習』の要素を取り入れた場面を設定していますか」という問いに対しては「よく設定している」、「時々設定している」が合わせて42.9%となっている。場面の設定ができていない理由は「効率よく進めることを重視してしまう」、「単元内容を教える（説明する）ことに手いっぱいになる」、「どのように取り入れたらよいかわからない」など、「課題発見・解決学習」の重要性は理解しているものの、具体的にどのように授業や部活動等の指導内容に取り入れたらよいかわからないと考える教員がいることが分かった。

この解決に向けては、「課題発見・解決学習」についての研修会や研究授業を継続的に実施することが必要である。それにより「課題発見・解決学習」についての理解をより深めるとともに、本校生徒の学びを深めるための手法を考察することができると考えている。また、県内外の地域と連携した取組事例を分析し、本校生徒の学びを深めるために、系統的・教科横断的な指導方法を構築していくことが課題であると考えている。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・「ビジネス探究プログラムⅠ（ビジネス基礎）」、「ビジネス探究プログラムⅡ（EEプログラム）」、「課題研究」の系統性が整理され、それぞれの科目で身に付けさせたい資質・能力が明確になっており、資質・能力の習得を見取るためのルーブリックが作成されている。
- ・教科横断的な学習指導の具体的方策について、研修等を通じて、教員が明確に理解している。

イ アウトカム（成果目標）

- ・「ビジネス探究プログラムⅡ（EEプログラム）」における「NFTE Mindset（8つの資質・能力）」の評価3以上の生徒が70%以上になっている。
- ・教科横断的な学習活動の方策に関する研修会を実施後の教員アンケートで、「実践につなげることができる」とする肯定的評価が80%以上になっている。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

本校では、教育目標に定める「幅広い教養とビジネスに必要な力を身に付け、社会の発展に貢献できる人財を育成する」ことを目指し、次の資質・能力を生徒に育成するためのカリキュラムを開発する。2(4)イで挙げた3つの資質・能力（「ビジネスに係る最先端の知識・技術」、「新しいビジネスを創造する能力」、「他者と協働してよりよく課題を解

決する能力)を育成するために、次のカリキュラム開発に令和4年度は重点的に取り組む。

- 1・2年次「ビジネス探究プログラムⅠ・Ⅱ」、3年次「課題研究」による「課題発見・解決学習」の充実
- 1～3年次「フレックス・タイム(F T)」による個別最適な学びの充実と外部機関との連携
- 共通教科における「課題発見・解決学習」の授業実践

イ 校内体制

令和3年度は教育目標の実現に向けた学科改編、カリキュラム開発を行った。本校での3年間で系統的な学びにつながる教育課程となるよう各教科が主体的に考え、生徒の資質・能力の育成に必要な科目を選択し、編成した。それらを引き続き教育課程検討プロジェクト会議(管理職・主幹教諭・教務主任・進路指導主事・商業学科主任を中心としたメンバー)を中心に教科主任会議などと連携し、本校の教育目標や育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力を達成できるよう、実施状況や指導内容を検証し、より適切なものとなるように開発する。また、適切な学習評価となるよう指標や方法についても研修会を開催し、指導と評価が適切に実施できるように工夫する。さらに、科目の系統性を多角的に検証するとともに、学校運営協議会や「課題発見・解決学習」の実行委員会等でカリキュラム開発について外部有識者と連携することによって、社会に開かれた教育課程を編成していく。